

# 韓国櫛文土器文化の 土器圧痕と初期農耕

Early Agriculture in Korea Reconstructed by Millet Impressions  
on the Chulmun Potteries

小畑弘己・真邊 彩

OBATA Hiroki and MANABE Aya

- ① 本論の目的と論点
- ② 調査に至る経緯と既存研究のあらまし
- ③ 調査対象遺跡と調査方法
- ④ 圧痕調査の結果
- ⑤ 考察
- ⑥ 結論

## 【論文要旨】

縄文時代に植物栽培が行われたことは、すべての人が認めるものではないが、今日的な研究成果をみれば、栽培の規模の大小や形態は別として、ほぼ揺るぎないことと思われる。今日の実証的研究の成果によると、縄文時代に栽培されていた植物は、農学や地理学で提唱された照葉樹林文化論や縄文農耕論で想定されていたような作物ではなく、我が国に起源をもつダイズやアズキなどのマメ類やヒエであった。この意味でも、縄文文化は狩猟採集だけを生業にした文化ではなく、植物栽培も取り込んだ多角的な生業戦略を行っていた文化といえる。この点では、朝鮮半島の新石器文化にも相通じる部分がある。

本論は朝鮮半島南部の新石器時代における栽培植物の起源と伝播を圧痕レプリカ法による調査成果から検証することを主たる目的とするが、栽培植物の受容の在り方についての朝鮮半島・日本列島両地域の共通性、さらには、海峡を越えた大陸系穀物の伝播が縄文時代にあったのか否かについても検討し、その背景となった海峡を挟んだ両地域の交流形態について考察する。

東三洞貝塚をはじめとする朝鮮半島東南部の新石器時代の遺跡から発見された既存資料（炭化穀物）を1000～1500年遡るキビやアワの圧痕は、これまでの華北型雑穀農耕の伝播と受容のシステムに関する仮説を覆した。それは、寒冷化による人の移動を伴う農耕パッケージの伝播ではなく、玉突き的な穀物と技術の伝播拡散によるものと推定される。この地において、雑穀栽培は狩猟採集経済を軸とした生業の一部として、アワ・キビは貯蔵が可能な食糧の一つとして、無理なく受容され、地域的に発達したものと考えられる。

この雑穀農耕の日本列島への伝播の痕跡は現在のところ認められない。それは両地域の交流が、漁民を通じた情報の伝達を主たるものとし、土器を保持した人や集団の移動ではなかったことを意味している。そのような農耕の伝播形態は両地域においては青銅器時代（弥生時代）以降にみられるものである。

【キーワード】 韓国, 櫛文土器, 新石器時代, 初期農耕, アワ, キビ, 華北型雑穀農耕